～英雄伝 四人の英雄～

竜樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～英雄伝　四人の英雄～

【Ｎコード】
Ｎ４９０８Ｂ

【作者名】
竜樹

【あらすじ】
中立都市ウラヌスの普通の高校生だったリン・アサヒナ（男）は今まで関係無かった統合軍と反乱軍の戦争に巻き込まれてしまう。戦争の残酷さを知ったリン・アサヒナは統合軍の戦艦インヒィニティー・ラブに乗り戦争を終結させるために仲間達と走りだす。

第1章　二人の赤ん坊（前書き）

これは　実質はプロローグみたいな物です。
まだまだ未熟なので、おかしいところがあると思いますが多目にみてください。
変な所は評価で指摘して貰えると嬉しいです。
出来る限りは直していきます。

第1章　二人の赤ん坊

暗い夜道を男は走っている。

手には二人の赤ん坊を抱き抱えている。

男は走り続ける。

しかし何時までも走り続けられる筈もなく息を切らして立ち止まってしまう。

男は焦っていた。

足音がだんだん近付いて来る。

何処か隠れる所はないのか辺りを見回す。

あった。

後ろを見る。

追ってはまだこっちを見つけてはいない。

悩んでいる暇はなかった。

男は荒れ果てたボロ小屋に飛込んだ。

予想外にも女がいた。

暗く顔は良く見えない。
男の顔がこわばる。
声を上げられたらバレてしまう。
しかし女はそうしなかった。
女が静かに問いかけてくる。
「あなたは何故焦っているのですか？」
その声は何故か男を安心させた。
「追われているからです。」
男は返事をした。
男は久しぶりに声を出した気がした。
「何故　追われているのですか？」
女の声は男の緊張をほぐしていった。
男は話した。
何故追われているかを男がなにをしたかを。
女は黙って聞いていた。

知らぬ間に夜が明けていた。

女は美しかった。

女の髪は細く小麦色で陽光を反射して光っていた。

眼は大きく、髪と同じ色をし男を見つめていた。

男は暫し見とれていた。

我に帰った男は赤ん坊達を差し出した。

「この子達を預かってはくれまいか？
この子達は我々の希望なんだ。
奴らに奪われる訳にはいかない。」
何故か男はこの女に任せれば大丈夫だと思った。

女が静かに頷くのを確認すると男は微笑んで去っていった。

残された女の腕の中では髪の色が銀と赤の同じ顔をした二人の赤ん坊が眠っていた。

第2章　始動

衛星都市ウラヌスは平和な都市である。

ウラヌスの外では毎日戦争が行われているらしいがそんな実感はほとんどわかない。

ウラヌスの都民は戦争など無関係な物だと思っていた。

この少年リン・アサヒナもそんなウラヌスの都民の一人だった。

「ウシッ　今日もいい感じだ。」

リンは大きく深呼吸をする。銀色の髪がフワッと揺れる。

周りにはやけに柄の悪い人達が数人横たわっている。

リンはウラヌスではかなりの有名人である。

まず、その容姿が有名である。

光を振り撒く銀色の髪に銀色の眼そして17歳になっても女子に間違われる中性的な顔が嫌でも人目をひきつける。

さらにウラヌスのトップの高校で一番成績が良く、スポーツも何をやらせてもエースでは有名になるのは仕方がない。

しかし、それは妬みを生み不良が絡んでくるなんてザラである。

それを全て返り討ちにしているのもリンの逸話のひとつである。

「片付いたし　ガッコ行くか。」

登校中だったリンは再び歩き出した。

「あーあ

今日も遅刻か・・・」

時計を見ながらリンがぼやく。

「さぼろうかなぁ」

今更急いでも遅刻という状況はリンのやる気をそいでいた。

幸い煩い両親は出張中だ確か後一週間は帰れないっていっていた。

「よし　今日は帰って寝よう。」

皮肉にもこの決断はリンの命を救う事になる。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

「さて、準備はいいかな?」

サングラスを掛けハイビスカスの柄のシャツに着、短パンを男がはいた男が自分の周りの男達を見回して言う。

その格好は浅黒い肌と茶色髪に妙にマッチしていた。
それに比べ周りの男達は全身真っ黒だった。
「隊長　その格好はなんなんですか？バカンスにでも行くつもりですか？」
「いや　何。僕の今回の役目は機人で都市を脅かすだけだから軽装でいいんだよ。
こんな平和ボケした都市に機人の装甲を貫く武器なんて無いだろうし」
「隊長。今回の任務少し難易度が上がりそうです。」
無線の前にいた兵士が声をあげる。
「どうしたんだい？」
男の顔が少し真剣味を帯る。
「・・・奴らが包囲網を破ったそうです。」
通信担当の兵士は脅えるように言った。
「流石は　統合軍の剣　インヒィニティー・ラブだな。
そうだな少し早いがお祭りを始めようか。」
場に心地良い緊張がはりつめていくのを男は感じた。
「来るがいいインヒィニティー・ラブ。

反乱軍　紫雷のチャンが相手になろう。」
紫雷のチャンは高らかに宣言した。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

「艦長　敵陣突破しました。
クオゥディアス、ユートピア、ベーオウルフ　全機、回収しました。
」
戦艦インヒィニティー・ラブの内部で茶色の髪をポニーテールにした少女が報告する。
「損害は？」
落ち着きのある声で髪が白く染まりつつある初老の男が聞き返す。
「クオゥディアス、ユートピアは只今　破損が多く、１５時間以内の修復は不可能。
ベーオウルフは整備、補給が済めば発進は出来るそうです。」
「やはり犠牲は大きかったか。」
「けれど　　これで確かになったでヤンス。
反乱軍はウラヌスを破壊するつもりヤンス。」

真っ黒な躯に黄色いトサカを持ったペンギン型ロボットが金切り声をだす。

「チャック　分かってるかららそんな騒がないでよ。」

ポニーテールの少女が眉をひそめる。

「ミコト
取り合えずアトリを待機させておけ。」

艦長が指示を出す。

「了解」

ポニーテールの少女　ミコトが素早くスイッチを押していく。

『アトリ・ヤジマ大尉　自機にて待機してください』

艦内放送からミコトの声が流れてきた。

それはインヒィニティー・ラブの一室で考え事をしていた赤い髪を短く切り揃えている少女の耳にも届く。

艦内放送に顔を上げた少女の顔は驚く事にリンとうり二つだった。

そして胸のネームプレートには〔アトリ・ヤジマ〕という文字がハッキリと刻まれている。

「オーイ　アトリー。待機しろだってー。」
ドアをドンドン叩き声を上げてた人物がいる。
アトリはドアを開けて目の前にいる髪を真っ直ぐ伸ばした黒髪の女性に向かって言う。
「・・・聞こえてる」
「よし　じゃあ行こうか。」
そう言ってアトリの手を取りズンズン進んで行く女性をアトリは不満そうに見る。
「ノエル・アービング中尉　それが上官に対する態度ですか。」
「気にしない　気にしない。」
ノエルは気にしないで進んで行く。
もうなんと言っても無駄なのを知ってるアトリはおとなしく引きずられていった。
収納庫が見えてきた。アトリ達の機体は此処に収納されている。
収納庫に入る直前ノエルは急に真面目な顔をしてアトリの方を向いた。
「私とルイスは今回　出られない。
一人で戦う事になるわ気を付けてね。」

「大丈夫。私は死なない。
目的を果たすまでは。」

アトリは微かに微笑んで応えた。

少し驚いた表情をしているノエルを後にして収納庫に入り自分の機体に乗った。

アトリの髪と同じ真っ赤な機体、Ｇ－００２　ベーオウルフ。

これがアトリの剣だった。

ベーオウルフは只そこにじっとして牙を剥く時をまっていた。

アトリはコックピットの中で蹲る。

（私は自分の半身を見付けて戦争を終わらす。
これが私の使命。
やり遂げるまで死ぬわけにはいかない。）

決意を胸にアトリは牙を磨いている。

第3章　生き残った少年

「くー　くー」

リンは僅に寝息を立てながらベットで寝ている。

しかしリンの眠りは轟音と供に終わりを告げた。

「な　なんだぁ」

些かありきたりな反応をしつつ窓の外を見る。

リンの目に入ったのは煙を上げる街、そして紫の機人。

「なんだよ。これ」

リンは慌てて外に飛び出す。

見るとリンの学校のあった方角は火に包まれていた。

それを見つめる機人が笑っているようにリンには見えた。

次の瞬間機人は持っていたミサイルランチャーをこちらに向けた。

ミサイルランチャーといっても機人用だ。弾はビルより大きい。

リンはそれを只見ている事しかできない。

そして感じた事は死への恐怖。

（俺　死ぬのか？
たった１７歳で人生終わりかよ。
クソッ。）

しかし紫の機人からミサイルが発射される事は無かった。
その前に紫の機人に向かってミサイルの嵐が降り注ぐ。
紫の機人はそれを紙一重で回避した。

『我々は統合軍戦艦のインヒィニティー・ラブだ。
関係の無い者は今すぐシェルターに避難したまえ。
此処は戦場になる。
繰り返す、我々はー』

現れた純白の戦艦が外部マイクで呼び掛けていた。

インヒィニティー・ラブ　その名前はウラヌスに住んでいたリンでさえ聞き覚えがあった。統合軍最高の人材と機人を揃えている最強の戦艦　インヒィニティー・ラブ。

ミサイルの爆風に髪をなびかせながらリンが呟く。

「スゲー　あれがインヒィニティー・ラブか」

次々と変化していく状況にリンの頭はフル回転させて対応していた。

「シェルターか　確かあっちだよな」

そして、すぐにシェルターに向かって走り出した。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

「よし　ベーオウルフを出せ。」

一通り避難勧告をした後艦長がミコトに言う。

「了解」

『ベーオウルフ　アトリ機発進してください』

「了解しました。」

収納庫の中アトリは命令を聞くと手早くベーオウルフを起動、カタパルトに移動する。

「ベーオウルフ発進します。」

ベーオウルフはカタパルトを滑走していく。

アトリの体に強烈なGがかかる。

数舜後　ベーオウルフは猛スピードで飛行して紫の機体を蹴り飛ばした。

ベーオウルフ　小柄な体格をしているが脇の長い砲身を持ったライフル（通称【ケロベロス）や４連ミサイルランチャーなど重火器を装備した、中～遠距離で性能を最大限に生かせる機体である。

コックピットの中で顔を上げたアトリの額には幾何学的な紋様が浮かんでいる。それは僅かに赤く発光していた。

「アトリ、今回のターゲットは通称ヴェノム　反乱軍のエースだ。かなり手強いぞ。」

「了解」

通信機に呟くと敵の機人に注意を向ける。
装備は通常のライフルのみたいだけど・・・

ヴェノムは色以外は地味な機人だった。

装備は基本はライフルだけである。

しかし背中から四方に伸びている、まるで十字架のような物がアトリに警戒心を与えた。

暫しの硬直。

破ったのはヴェノムだった。

ライフルを連射しながら突撃して来る。

ベーオウルフは右足のバーニアを噴かして避けると右側の【ケロベロス】をヴェノムに向ける。発射。

太い光条がヴェノムのすぐ横を通っていった。

「今のを避けるなんて・・・」

アトリにとっての必殺のタイミングだった。

「流石はエースってとこね。」

アトリは気を引き締めた。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

戦闘から少し離れた所では二人の男女が車を走らせていた。

「まったく艦長も人使いが荒いなぁ～」

背が１８０ｃｍを越える蒼い髪の青年が心底　面倒くさいというような顔で横にいたノエルに話しかける。

「ルイス　これも任務よ我慢なさい。ユートピアとクオディアスが動かせない今の私達がでしる事なんてこの位ですもの。」

ノエルは戦闘が起こっている場所に目を向ける。

「それにしても　民間人の保護ってなにをすればいいんだ？」

ルイスが聞く。
「とりあえずシェルターの近くに行ってみましょう。
もし途中で人を見かけたらシェルターまで送りましょう。」
しかし二人は自分達の向かっている所に煙が上がっているのに気が付く。
「ルイスっ」
「ああ　分かってる」
ルイスは車のスピードを上げた。
「もしかして反乱軍が何かしたの？」
「多分な。取り合えず急ぐぞ。」
暫く走っていると白い山の様な物が見えて来る。
「酷い・・・」
ノエルは目の前の惨状に目を覆う。
シェルターは爆破されていて最早ただの瓦礫の山となっていた。
「こりゃあ　生き残りは誰もいないぜ」
ノエルはルイスを睨みつけるが直ぐに肩を落としてしまう。
「しっかりしろよ。

あんたらしくも無い。」

しかしノエルは脱力したままだった。

ルイスはヤレヤレとでもいう様に首を振った。

そしてノエルに近付くとその体を肩に担いだ。

びっくりするのはノエルである。

「何するのよルイス！」

ノエルが暴れるがルイスはビクともしない。

「船に戻るんだよ。

あのシェルターは中から爆破されていたんだぞ。

まだ近くに工作員がいるかもしれない。」

ルイスが諭す様に言う。

「ちょっと待って。」

ノエルが声の調子を変えた。

しかしルイスは気付かないでノエルを担いだまま　それを無視してどんどん歩いて行く。

「待てって言ってるでしょっ」

ルイスの頭に強烈な一撃が加えられる。ルイスが蹲るすきにノエル

は脱出した。

「さっき　アッチに人影があったの確認してくる。」

走って行きながらノエルが言い残して行く。

「ったく。」

ため息をつきながらもルイスも後に続いた。

「一体どこら辺にいたんだ？」

追い付いて来たルイスが尋ねる。

「ほら　あそこ」

ノエルが指差す所を見る。

そこには確かに銀色の髪が見えた。

「ノエルはここに居ろ」

そして声をかける。

「おい　お前。？」

その声に銀色の髪の人物が振り向いた。

「なっ、アトリ・・・」

その顔はアトリにそっくりだった。
違うのは髪と目の色だけだ。
ノエルも思わず近付き呆然とする。

◇　◇　◇　◇　◇

リンは自分の無力を嘆くしかなかった。
自分は力があると思っていた。しかしそれは違った。
紫の機人からは恐怖を感じた。
そして逃げ出した。
そんな時、携帯から連絡が入る。
「もしもし」
『あっ　繋がった。
今　何処にいるの？
学校の皆はシェルターにいるんだけど』
クラスメイトだった。
「学校が燃えてたけど大丈夫だったのか？」

『うん　何とか皆逃げられた。
少し怪我した奴もいるけど大丈夫。』
「俺もすぐにシェルターに行くから」
リンの目の前にはシェルターが見えて来た。
リンは携帯を切って足を早める。
しかしシェルターはリンが　たどり着く前に爆散した。
「おい　ちょっと待てよ。
何が起こったんだよ。」
リンは呆然と瓦礫の山となったシェルターに近付く。
こんなんじゃ誰も生きている訳がない。
頭で理解してても心が拒否した。
友人に片っ端から連絡する。何回も。何回も。
しかし出る人はいなかった。
携帯を持った手をダラリと下げる。
（俺は無力だ）
リンの頬に涙が流れた。

１０分程たったろうか落ち着いて来たリンに声がかけられる。
振り向くと軍服を着た二人の男女がこちらを見ていた。
なぜか呆然としている。
女性の方は何か呟いたが聞こえなかった。。
「何か用ですか？」
リンが尋ねると二人はハッとする。
「そうね　アトリが此処にいる訳がないわね。
ゴメンなさい。
あなたはウラヌスの市民ですよね。」
女性の方が尋ねる。
リンが頷くと質問を続けた。
「あなたの他に生き残りは？」
これにはリンは横に首を振る。
「あなた達はだれなんですか？」
今度はリンが尋ねる。
「私達は統合軍よ。
私はノエル。
彼はルイスよ。

ウラヌスの市民を保護するために来たのだけれど。
あなたには取り合えず私達の船に来てもらいます。
他に安全な所は無いんで。」

そしてノエルとルイスは歩きはじめる。

リンはしばらく考えていたが二人の後についていった。

この時すでにリンはウラヌスで唯一の生き残りになっていた。

第４章　危険信号

荒れ果てた道を車が走って行く。

車には三人の人物が乗っていた。しかし車の中で会話はほとんどなされていない。

「そういえば　あなた、名前は？」

運転席に座っているノエルが後部座席に座るリンに話かける。

「・・・リン・アサヒナ」

リンはそう言って再び黙ってしまう。

リンは先ほどからずっと何かを考えている。

「リン・アサヒナね」

（にしても　本当にアトリに良く似ているわね。）

アトリとは髪と目の色以外はコピーしたかのようだった。

そしてアトリの事を思う。

一人　敵に立ち向かっている少女は無事なのだろうか？

「アトリの奴は大丈夫かな。」

黙っていたルイスが呟く。

「馬鹿ね。あのアトリが負ける訳ないわよ。」

それは自分に対しても言った言葉だった。

◇　◇　◇　◇　◇

「強い・・・」

最初はウラヌスの事を気遣っていたアトリもヴェノムの戦闘力の高さに押されはじめていた。

一方　ヴェノムのコックピット内

「確かに威力はある。だが僕を捉えるにはスピードが足りないな。」

チャンが批評する。

ベーオウルフはまた【ケロベロス】を向けてくる。

「だから遅いって。」

【ケロベロス】が完全に向く前にチャンはヴェノムを射線からずらす。

回避成功。

「さて、そろそろ終わらせるか。」
チャンはヴェノムにライフルを構えさせた。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

「ミコトくん。
ノエル達はどうしている？」
艦長がミコトに尋ねる。
「今　少年を一人保護してこちらに向かっているそうです。」
「そうか。
アトリ、持ってくれよ。」
目の前ではアトリが劣勢を強いれている。
艦長達にはただ見ている事しかできなかった。

第5章　銀色の機人

「おいっ、
もっとスピードは出ないのかよ。」

ルイスの焦った声。

「これが限界よ。」

歯を食い縛ってノエルがうめく。

彼等の目にはボロボロになって攻撃を辛うじてかわしているベーオウルフがいる。

「なぁ　赤い方はアンタ達の味方なのか？」

今まで自分からは話しかけなかったリンが尋ねるが焦ったいる二人はそれ所ではない。

「そうだよ。」

とルイスに怒鳴られて終わってしまう。

（なんだろう　あの赤い方から懐かしい感じがする。）

しかしリンには答えを出す事が出来ない。

いつの間にかインヒィニティー・ラブが前に見えている。

しかし車は減速どころか加速していった。

そして衝撃。

車はインヒィニティー・ラブの格納庫に突っ込んでいた。

リンが車の外に目をやると中年の男が唖然とこちらを見ている。

「おやっさん　私達の機人は？」

車から飛び下りる早々にノエルが中年の男に聞く。

「まだ　駄目だ。

後　２時間は出せないぞ。」

車が突っ込んでくるという衝撃から立ち直ったるおやっさんは断言する。

「アトリがやられちまいそうなんだ。

いいから出させてくれよ。」

ルイスが言いつのる。

「この状態で出ても死ぬだけだ。

送り出す訳には行かないなぁ。」

しかしおやっさんも譲らない。

「何か手は無いのか？」

ルイスの質問におやっさんは首を振る。

「祈るしかないな。」

言い争っていたため誰もリンが格納庫から出て行く事に気が付かなかった。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

（呼ばれている？）

リンはフラフラと格納庫から出ていった。

頭には声が響いている。

『貴方の剣を取りなさい。
もう一人の貴方を護(まもる)ために・・・
貴方達は二人で一人なのだから。
剣を取りなさいこちらです。早く。
こちらです。』

リン声に従って歩いて行った。

逆らう事はできなかった。

そして、一つの扉の前に辿り着く。

そこには厳重なロックがかかっていたが、リンはパスワードを知っていた。

【ＡＴＯＲＩ】

気の抜けた音と共にドアが開く。

中には銀色の機人がいた。

「テンペスト・・・

俺の剣・・・」

リンには次にどうしたらいいのか分かっていた。

リフトでテンペストの胸本まで来るとコックピットに飛び乗った。

外へと続くハッチを開くとテンペストは外に物凄い速さで飛び出した。

◇　◇　◇　◇　◇

「艦長、第１３区画のハッチ開放されました。」

ミコトが艦内の異変に真っ先に気付いた。
「13区画だって？
あのパスワードを解読したって言うのかい？」
格納庫からうるさいという理由で追い出されたルイスが驚く。
「いや、おそらく知っていたんだろう。
あの中に眠っている機人はベーオウルフと同様にある人物にしか動かせないとシェリーから聞いた事がある。」
「天才シェリーですか。
確かこの艦も手掛けたんですよね。
なら　シェリーさんは特定の人物に自分の造った機人に乗ってもらいたかったって事ですね。
それで、その人にだけパスワードを与えた。」
ミコトが要約したのを聞いてルイスは頷く。
「13区画の隔壁が開きます。」
ミコトは新たな情報を告げる。
「出るのか？
ミコト　通信を繋げ。」
「了解」

◇　◇　◇　◇　◇　◇

「俺は何でこんな事を出来るのだろう。」

飛んでいるテンペストの中にリンはいる。

『これは貴方の半身を護ための力。
そして貴方の願いを叶える力。
貴方の願いはなんですか？』

またしても頭の中から声がしてきた。

「願い？

俺の願いは世界の平和だっ。
二度とウラヌスの様な場所を作らないためにも。

この原因を潰す！」

リンの額にはアトリとは僅かに異なる紋章が銀色に光っていた。

その時、通信が入る。

『こちらはインヒィニティー・ラブです。

あなたの名前は？何をするつもりなんですか？』

ミコトの声が響く。

「名前はリン・アサヒナ。目的はウラヌスをこんなにした紫の奴をぶっ潰す事。」

『分かりました。
では、最後に貴方は私達の敵ですか味方ですか？』

「さぁ　けど赤い奴は殺らせはしない。」

リンは赤い機人に乗っている人物が自分の半身、護べき人なのだと直感的に分かっていた。

そしてリンは通信を切ってしまった。

◇　◇　◇　◇　◇

「きゃあ」

ベーオウルフの装甲をヴェノムの銃弾が削る。

ベーオウルフの損傷率は既に３０％を越えていて様々な所から煙が出ている。

反撃も撤退も出来ないままベーオウルフは辛うじて攻撃をかわしている。

しかし、かわしきれなかった銃弾が脚部に当たる。

「しまった」

アトリは倒れたベーオウルフを立て直そうとするが脚部の破損により
りできない。

ヴェノムのライフルの銃口が向けられる。

アトリは目をつぶる。

・・・・・・・

・・・・・

・・？

しかし来ると思っていた衝撃が来ない。

うっすらと目を開くと銀色が目にはいった。

銀色の機人が楯でベーオウルフを守っている。

「これは？」

一瞬は疑問を浮かべたアトリだったが、すぐに理解する。

「やっと見つけた。
もう一人の私。」

またテンペストのリンも同様に理解する。

「もう一人の俺を護ためにこの力はある。

傷つけた奴は許さない！！」

テンペストはヴェノムに向かって矢の様に駆けて行く。

手にはブレードが握られている。

ヴェノムは辛うじてかわす。

しかしテンペストの投げた新たな刃にまでは反応できなかった。。

刃は回転してヴェノムの腰より下を切り落としていた。

凄まじい早業である。

リンはアトリがあれ程てこずっていたヴェノムを参戦して僅かに数秒で追い詰めた。

スラスターを噴かしてヴェノムは逃げようとするがリンが逃がすわけもない。

テンペストの背中から１０発のミサイルが撃たれる。

ミサイルは真っ直ぐにヴェノムに向かって行く。

しかしヴェノムは慌てずに背後から十字架を取りだしテンペストに向けた。

十字架が光出す。

リンはそのとたんに鳥肌がたった。

近くにいたベーオウルフを抱きかかえるとその場を飛び去る。

十字架から光線が放たれる。

光線が通った後を見たアトリとリンは絶句する。

通った後にはビル等があった筈だが何もなくなっている。

ヴェノムはそんな二人を尻目に去って行った。

第6章　新たな決意

「これからインヒィニティー・ラブに居る事になったリン・アサヒナです。」

リンはそう言って礼をした。

こうなった理由は1時間程前に遡る。

リンのテンペストはベーオウルフを支えながらインヒィニティー・ラブに戻った。

（俺　これからどうしよっか）

リンが悩んでいる内にアトリが自分の機人から降りた。

そしてこっちを見て手招きをした。

（……とりあえず降りるか）

自分もハッチを開いて降りていった。

降りた先には自分と同じ顔をした少女がいた。

（……俺？

いやでも胸があるってことは女？）

「私はアトリ　あなたは？」

自分の世界に行っていたリンは慌てて答える。

「お　俺はリン。
リン・アサヒナだ」

「貴方がもう一人の私……
ずっと捜してた」

「俺は一体なんなんだ？
なんで機人に乗ることが出来たんだ？」

「私は貴方。貴方は私。
そして人間とは異なる存在。」

「？？？？」

「今分からなくてもいずれ分かるようになるわ」

ドアが開く音がして、そこを見るとノエルが入って来た。

「アトリ～」

叫びながらアトリに飛び付くノエル。

ノエル身長１７５ｃｍ、アトリ身長１６５ｃｍ。

身長差が１０ｃｍもあるノエルに飛び付かれてアトリが無事な筈もなく派手に後ろにぶっ倒れる。

「アトリ～　無事で良かった～」

倒れたアトリにいまだしがみつきながらノエルが尋ねる。

「……貴方のせいで無事じゃなくなりましたよ」

上半身だけ起こしながらアトリが言う。

しかしノエルの興味は既にリンに向いていた。

「確かリン・アサヒナだったよね。
アトリを助けてくれてありがとう。
けど貴方　何者？
あの機人の操作は素人の物じゃないよ」

「リンは味方。私が保証する」

アトリが答えるとノエルは少し目を丸くした。

「アトリがそんな事言うなんて珍しいね。
アトリとリンて何か関係あるの？
顔は似てるとは思ってたけど」

「リンは私の大切な人……
そうね、姉弟みたいな感じが一番近いわ。」

（そうなのか？）

アトリの言葉にリンは内心疑問をうかべる。

「フーン　姉弟ねぇ。
とにかく、リンに艦長が話があるんだってとりあえず着いて来て」

◇　◇　◇　◇　◇　◇

「私が艦長だ。
リン・アサヒナ君だったね。
本当にアトリに似ているな。
そんなに緊張する事はない。
ただ何であの扉のパスワードが分かったのかが聞きたいだけなんだよ」

「あの扉？」

リンが質問で返す。

「あの機人が保管されてた部屋ヤンス」

チャックが横から声をかける。

「ペンギン！？」

初めてチャックを見たリンの反応はそんな物だった。

「ありきたり……」

「ありきたりね」

「ありきたりだな」

順番にアトリ、ノエル、ルイスにそう突っ込まれるリン。

「皆　新しい人いじめるの辞めなよ。
チャックを見た人の八割はそうゆう反応しかできないわよ」

ミコトが注意する。

「あんたは？」

リンの当然の疑問。

「あっ、あたしはミコト・ワグネルです。

このペンギンはチャックです」

「よろしくでヤンス」

「もう話を戻してもいいかな？」

「あっ、すみません」

リンが頭を下げる。

「なんでパスワードが分かったのかって聞かれても頭の中に勝手に浮かんだんですよ」

「やはり　そうか……」

艦長が呟く。

「それで君はこれからどうするのかね？
軍に入るのなら優遇するが」

その質問に対してリンは即答する。

「入ります」

「おいおい　そんなに簡単に決めていいのかよ」

ルイスが呆れたように首を振る。

「いいんです。
もう帰る場所も無いし。
俺は機人に乗れる。
この力を戦争を終わらせるのに使いたいんです」

リンはハッキリと言った。

「分かった　君の意思を尊重しよう。
ようこそインヒィニティー・ラブへ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4908b/

～英雄伝 四人の英雄～

2010年10月28日03時48分発行